

教えて！！漢方&鍼灸



～感染症と東洋医学～

2021 年 3 月 大学ニュース 掲載

助教 津嶋 伸彦

古来より医学は感染症とともにあり、感染症に対して人類は、抗菌剤、抗ウィルス剤やワクチンなどの開発、公衆衛生管理などさまざまな方法で対応してきました。

ここでは、現代において感染症として認識されている病気を、東洋医学ではどのように捉え、どのように対応してきたか、マラリアを例に挙げてご紹介していこうと思います。



マラリアはマラリア原虫を原因とする感染症で、韓国や中国などの温帯地方の三日熱マラリア原虫、アフリカ・アジアの熱帯地方の熱帯熱マラリア原虫が有名であり、水辺に生息するハマダラカを媒介として感染します。マラリアに対して免疫のない旅行者が帰国後に発症する

例も多く、全世界では年間 3 万人

程度あるとされています。マラリアに免疫がない人が初感染した場合、発熱は必発で、原虫侵入後の潜伏期は熱帯熱マラリアで 12 日前後、三日熱マラリアでは 14 日前後です。



典型的な症状は、潜伏期間の後、悪寒、震えとともに間欠的な熱発作を発症します。この熱発作の間隔は、三日熱マラリアで 48 時間ごと、熱帯マラリアでは不定期で短いです。発熱に伴い、倦怠感、頭痛、筋肉痛、関節痛などがみられますが、腹部症状（悪心・嘔吐、下痢、腹痛）や、呼吸器症状がめだつこともあり、重症化すると脳症、腎症、呼吸器症状、多臓器不全など種々の合併症を来します。治療薬としてキニーネ、クロロキン、アルテスネート、アーテニシミンや、肝細胞内の休眠体原虫に対してプリマキンなどが用いられます。



教えて！！漢方&鍼灸



東洋医学的にはどうかというと、紀元前 200～紀元 200 年頃に中国で書かれた『黄帝内経』という書物には「瘧（ギャク）」という病名があり、「瘧の起こり始めは顎が震えるほどの悪寒がして、腰脊がともに痛み、悪寒が去れば体の中も外も熱くなり、破れるような頭痛がする。・・・腰背頭頂が痛み、骨が冷えて痛む。・・・発熱の発作は 2 日空くこともあれば数日空くこともある。」とマラリアの症状と一致する記載があります。

「瘧」に対する治療法としては、紀元 8 世紀に中国で書かれた『外台秘要』には、症状などにより 21 種類の薬が記載されています。中国のマラリア研究チーム主任の屠呦呦（トゥ・ユウユウ）は、紀元 4 世紀の『肘後備急方』にある「治瘧病方。・・・青蒿一握。以水二升漬，絞取汁。盡服之。」という記載から、ヨモギの仲間である青蒿からマラリアに効果のあるアーテニシミンを発見し、2015 年、ノーベル賞を受賞しましたが、アーテニシミン発見までに、「瘧」やマラリア同様の症状に効くとされていた 640 処方を調べ上げたといいます。

「瘧」と記載されている症状がすべて「マラリア」によるものかどうかは不明ですが、東洋医学では、病原微生物に対してではなく、人間の病気への反応を詳しく観察し、症状によって分類し、それらに対して処方を記載していることが分かります。



感染症に対する東洋医学の効力に関しては未知の部分が多いのですが、東洋の古医書には先哲の叡智が結集されており、われわれはその伝統を継承しつつ、現代における医学に貢献していかなければならないと考えます。

[■東洋医学研究所ホームページへ戻る](#)